

# メキシコ先住民コミュニティにおける教育普及

## オトミーの事例

うけ だ ひろ ゆき  
受 田 宏 之

はじめに メキシコ先住民と学校教育  
オトミー・コミュニティ サンティアゴ・メスキ  
イトラン  
サンティアゴ・メスキイトランにおける学校教育  
の普及  
結論

### はじめに メキシコ先住民と学校 教育

近年、先住民は世界中で注目を浴びる存在となった。学校教育は、人間開発や基礎教育の完全普及という観点から、先住民に関してよく取り上げられる主題のひとつである。本稿では、課題を抱えつつも教育水準の上昇がみられる、メキシコのあるオトミー(族)コミュニティにおける教育の普及過程を取り上げる。零細な農業を生業とし、その貧しさやスペイン語をうまく話せないがゆえに非先住民から蔑まれることの多かったオトミーの間では、学校教育の普及は遅れた。だが、教育政策の変更や移住も含む社会経済状況の変容の中、彼らは徐々に教育を受け入れるようになる。こうした教育の普及過程は、非先住民との格差だけでなく先住民内での格差を伴うものであったが、それには公共政策のあり様も関与している。

オトミーが住むメキシコは、「新大陸」ラテン

アメリカでも最大級の先住民人口を擁する国である。『人口センサス』に従い言語を先住民の識別指標とすると、2000年に先住民言語を話す者は604万人であり、5歳以上人口の7.1パーセントを占めた。1930年には、先住民人口は225万人でありその比率は16.0パーセントだった。比重は逡減しているものの絶対数は増え続けている。移住の重要性が年々高まっているといえ、先住民の大半は農村部、それも遠隔地農村に居住している。そこでの生活水準は全般に低いが、先住民の貧困は低い教育水準の原因であり結果でもあった [ INEGI 1995; Panagides 1995 ]。

メキシコ先住民の教育状況を概観してみよう。表 - 1 には、1990年における教育関連指標が示されている。メキシコでは小中高と6-3-3制(6歳時に入学)が採用されている。3つの傾向を確認できる。第1に、中高年層の間では、15歳以上人口の識字率と教育水準が示すように、先住民 - 非先住民間に格差が存在する。だが、第2に、6~14歳児童の識字率(先住民71.1パーセント、非先住民88.2パーセント)と就学率(同69.8パーセント、87.0パーセント)から、若い学齢層の間では格差が縮まっていることが分かる。第3に、男女間の格差は先住民の方が顕著である。このように、指標が改善されつつあるといえ、先住民の間では学校教育の普及は遅れた。

表 - 1 メキシコの主要教育指標：先住民と非先住民（1990年）

		識字率 %		6～14歳児童 就学率 %	15歳以上学校教育 %				
		6～14歳	15歳以上		無教育	小学校未修了	小学校修了	小学校修了以上	不明
先住民	男性	73.0	70.2	73.0	28.0	37.0	16.0	15.8	3.2
	女性	69.3	48.1	66.5	45.8	28.7	11.6	8.9	5.0
	計	71.1	59.0	69.8	36.9	32.7	13.8	12.3	4.1
非先住民	男性	87.9	91.9	87.5	10.1	21.4	19.2	47.6	1.7
	女性	88.6	87.8	86.4	12.8	22.4	20.2	42.6	2.0
	計	88.2	89.8	87.0	11.5	21.9	19.7	45.0	1.9

（出所）識字率と15歳以上学校教育はINEGI（1995）。6～14歳児童就学率はINEGI（1992；1993）。

先住民への学校教育の普及は、様々な切り口から論じることができる。第1に、教育の供給主体である政府の役割に着目した研究がある。メキシコ革命（1910～40年）を経て、メキシコ政府は、先住民の国民統合を目的とする先住民政策や農地改革を通じて、先住民の生活水準を高めようとした。近代化から疎外された先住民を統合する政策手段として、教育、特に初等教育が重視された [ Aguirre-Beltrán 1991; INI 2000 ]。だが現実には、都市部と比べ農村部における教育施設の供給は滞りがちであった。ところが、後に「ポピュリズムの10年」と呼ばれる1970年代以降、先住民への教育は新たな装いをみせる。先住民人口の増大も手伝い、先住民学校 (escuelas indígenas) と分類される公立の小学校、幼稚園が急速に増えていく<sup>(注1)</sup>。先住民学校は先住民居住地域に位置し、地域出身者が教員として雇用され、そこでは建前上は2言語教育が行われているとされる [ 米村 1993 (a); 1993 (b); Bertely 1998; INI 2000 Tomo I : Capítulo 2, 287; Warman 2003, 97-98 ]。中学校以上の教育施設も、それに続いて建設されるようになった。さらに、自由主義的な開発モデルへとメキシコが針路を転換する1990年代以降、教育の質量における改

善が貧困削減戦略の中核を占めるようになる。その大半が貧困層である先住民は、条件付き所得移転プログラムPROGRESA ( Programa de Educación, Saludy Alimentación : 教育・健康・食糧プログラム。フォックス政権 [ 任期2000～06年 ] 下ではOportunidad [ 機会 ] と命名) などの社会政策の重要な対象とされた [ PROGRESA 2000; SEDESOL 2001 ]。こうした政策の変遷の背景を探る、政策を評価する、あるいは規範的観点から政策批判をする文献は多い。だがそれらは、教育現場で何が起きており、それが先住民の暮らしや期待の変化とどう関係しているのかを明らかにしない。

先住民への教育普及の2番目の切り口として、計量的な分析を挙げることができる。パナジッドやパーカーら少数だが、就学年数や教育の収益率への「先住民であること」の影響を、他の変数をできるだけコントロールした上で推計した研究がある [ Panagides 1995; 受田・久松 2001; Parker, Rubalcava and Teruel 2003 ]。これらは政策含意を導きやすい手法ではある。だが、先住民という変数は先住民自身にも操作の余地のある質的変数であるため、信頼するに足る統計資料の不足と合わせ、計量分析のできることには

限界がある。

第3に、特定地域の住民の間に教育が普及していく過程を詳細に論述する事例研究的な接近法がある。スペインによる植民地期（1521～1821年）以降のメキシコで、先住民の意味ある社会単位をなしてきたのは、コミュニティである。これら先住民コミュニティは、自然環境、言語、慣習などにおいて個性を持ち、それへの帰属は成員の社会的アイデンティティのひとつを構成する。コミュニティの中心部には通常、祭礼の組織等を通じて成員をまとめる機能を果たしてきたカトリック教会が存在する。さらにコミュニティは、行政上の単位を構成している。先住民政策では、コミュニティ単位でプログラムが実施されてきた。人類学者のウルフラが説いたように、これらコミュニティは、稀少資源や権力へのアクセスにおいて優位にたつ外部社会から孤立する傾向にあった。だが、20世紀に市場経済と政府の活動が浸透するにつれ、「閉じた同質的なコミュニティ」という理念型は当てはまらなくなっている。各コミュニティの内部にも、先住民とメスチソ（mestizo [混血]: 現在は非先住民を指す）住民、職業の多様化、政治権力へのアクセスの違い、プロテスタントへの改宗など、様々な次元において分化や利害対立がみられる [INI 2000; Wolf 2001, 124-138, 147-159; Warman 2003]。

このように特定コミュニティの事例を、その個性や変動、内部の葛藤にも目を配りつつ論じるという第3の切り口からの接近は、先住民研究の有力な手法である。だが、学校教育の普及という主題に関しては、こうした事例研究はほとんどなされてこなかった<sup>(注2)</sup>。本稿では、政府の教育政策が、様々な変化に直面する先住民

の間でどのように受けとめられてきたのかを、ひとつのコミュニティの事例研究を通じて明らかにする。

本稿が扱う先住民の事例は、サンティアゴ・メスキティトラン（Santiago Mexquititlán: 以下SMと表記）である。中央高原の北部を居住地としメキシコ先住民の中でも比較的人口の多い、オトミー・コミュニティのひとつである。SMは、住民の大部分がオトミー語を話すこと、人口増加率の高いこと、学校教育の普及が先住民の中でも遅れたこと<sup>(注3)</sup>、それでも近年教育水準の顕著な改善がみられること、都市部への移住さらには米国への出稼ぎへの依存度が高いこと等、興味深い特徴を備えている。また、他の先住民（移住者）と比べ都市の路上で物乞いする者の比率の際立って高いSMのオトミーは、研究者や政府関係者の間で外部者への不信感の強い先住民として知られ、調査が困難であるという点でも、本研究には資料的価値がある。

筆者は、1998年7月以来のべ2年半にわたり、現地調査を続けてきた。SMでは移住が目立つため、筆者の調査研究はメキシコ市に住む移住者の社会経済状況の記述と説明に主眼がおかれた [Ukeda 2001]。だが、2002年春よりSMに定期的に滞在し、そこでの教育にかかわる情報収集に努めてきた。本稿の一次資料は、教育関係者 SEP（Secretaría de Educación Pública: 公教育省）やINI（Instituto Nacional Indigenista: 全国先住民庁）<sup>(注4)</sup> など政府機関の地方職員、小中高等学校の校長や教員 やSMの村長、お年寄り、言語学者らへのインタビュー、オトミーおよび非オトミーのインフォーマントから見聞きした質的情報、SMの91世帯（オトミー世帯85、メスチソ世帯6）に筆者が実施した世帯調査<sup>(注5)</sup>、

および『人口センサス』等の公刊統計や教育統計である。

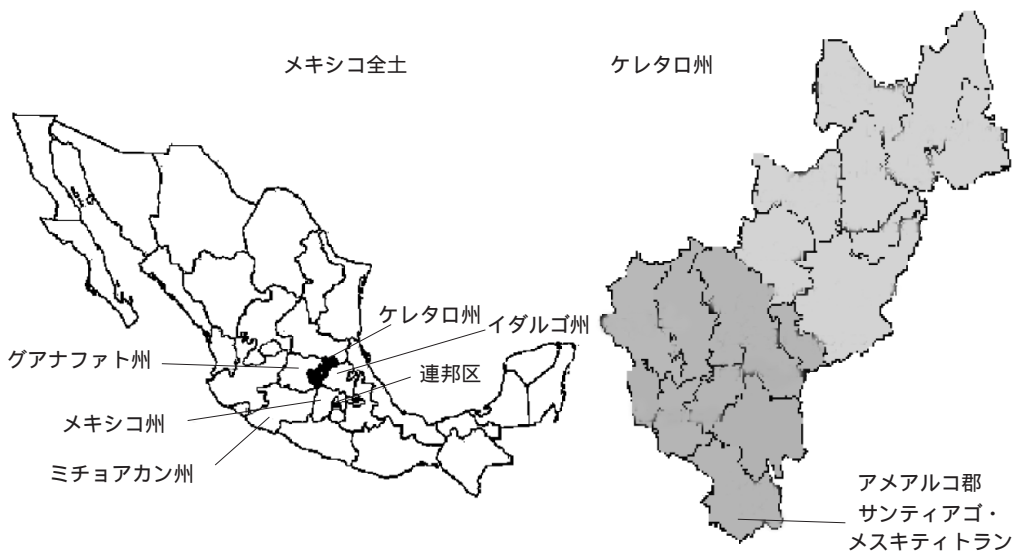
第 章では、調査地SMの歴史と特徴を述べる。続く第 章では、同コミュニティにおける学校教育の変遷を説明する。1960年代まではメスチソ児童と少数のオトミー児童しか参加していなかった学校教育が70年代以降、特に90年代に入ってオトミーの間に普及していく過程を、政府の政策および社会経済的変容に対する、オトミー側の対応として把握する。メスチソも含め異なる特徴を持つ世帯や人物の個人史も紹介する。第 章は結論である。

### オトミー・コミュニティ サンティアゴ・メスキティラン

オトミー語を話すオトミー（otomí, オトミー語ではnāāho）人口は、『2000年センサス』によ

れば、先住民総人口の4.8パーセントにあたる29万1722人であり、全国に62ある語族の中で6番目に多い〔INEGI 2001〕。サンティアゴ・メスキティランは、メキシコ中部ケタラ州の最南にあるアメアルコ郡（Amealco）の南端に位置する、同州最大のオトミー・コミュニティである。西はミチョアカン州、東から南にかけてはメキシコ州と隣接し、メキシコ州をさらに南下すると首都の連邦区へと至る（図 - 1）。面積は約40平方キロメートルである。海拔2000～2400メートルに位置し、年間平均気温は約15度、降水量は700ミリメートル前後に過ぎない。5世紀近い歴史を有するSMには、守護聖人を祀る主教会があり、近年ではオトミーが村長を務める郡政府の村役場（Delegación）があるなど行政単位でもある（注6）。2000年に人口1万42人を数えたが、先住民は5歳以上人口の91.5パーセントにあたる7744人だった〔INEGI 2001〕

図 - 1 ケタラ州とサンティアゴ・メスキティラン



（出所）筆者作成。

表 - 1 SMの世帯数と人口

『2000年人口センサス』			筆者による調査世帯 (2002年12月～2003年1月)	
区	世帯	人口	調査世帯	調査世帯の成員*
I	245	1,543	14	111
II	193	1,194	10	87
III	201	1,226	11	67
IV	216	1,228	13	85
V	267	1,711	15	106
VI	519	3,140	27	161
計	1,641	10,042	90	617

(出所) センサスはINEGI (2001)。注5を参照のこと。

(注) 調査世帯の成員には、1年の大半をSM外の土地で過ごすものの、回答者が成員とみなした者も含めた。ただし米国に出稼ぎ中の者は除いた。

行政的にはSMは1947年以来、6つの地区 (barrio) に分かれている (表 - 1 参照)。区Ⅰと区Ⅱは山がちなのに対し、区Ⅲと区Ⅳでは平地が続く。区の番号は概ね歴史の古さに対応している。最も古い区Ⅰは、中央広場に主教会、村役場などを備え、SMの宗教的、政治的中心をなす。平地の区Ⅲと区Ⅳは灌漑へのアクセスがあるのに対し、その他の区の山間部では、溜池のある世帯を除いて天水に頼る農業が今でも行われている。

スペイン語しか話さぬ者はまだ少数派であるが、その中で区Ⅰはメスチソ人口の比率が高く、25.6パーセントの住民はオトミー語を話さない。SMは周囲をメスチソ集落に囲まれているのだが、メスチソの中には、他村で生まれたものの食糧雑貨店などの商いをしにSMに移ってきた者、あるいは店だけをSM内に構える者もいる。肌の色などでしばしば見分けのつく彼らメスチソは、オトミーよりも社会経済的に恵まれている。SM内外に住むメスチソとオトミーの関係は、農業労働や家事労働の雇用主と被雇用者、

店主と客、といった経済的取引に限定されがちだった。オトミー住民の社会経済状況が改善し、彼らとメスチソ住民間の距離が縮まった現在においても、両者間の婚姻は稀である (注7)。オトミーと非オトミーが家庭をもうけると、通常次世代にオトミー語は伝達されないのだが、SMでこれまでオトミー語話者が高い比率を維持してきた大きな理由は、オトミーがオトミー内で配偶者を探してきたこと、および彼らの出生率が高いことにある。

アマアルコのオトミーの起源は、16世紀のスペインによる植民地化直後の時代にまで遡る [Prieto y Utrilla 2000, 14, 24-25]。全国で農地の集中化の進む19世紀末から20世紀初頭には、微々たる土地しか有していないSMのオトミーは、スペイン系の所有者が経営する近辺の大農園で農業労働者として働いた。これら大農園では、小麦栽培や粗放的の牧畜が大規模に営まれていた。この時代の過酷な生活は若い世代にも語り継がれている。

しかしオトミーも、1930～50年代にかけて、



メキシコ革命最大の成果のひとつである農地改革の受益者となる。区と区は、すべて改革によりオトミーが手にしたものである〔van de Fliert 1988, 53-59〕。改革により、SMの面積は2倍以上に拡大した。だが、1947年に家畜の処分を招いた口蹄疫の発生以降、移住者が徐々に増えていく。都市部での単純労働以外に、メスチソ集落に出かけての農業労働もオトミーの雇用先であった。さらに急速な人口増加は、父から既婚の息子達へと農地が移転されていく過程で農地の細分化をもたらし、『人口センサス』に従えば、1930年に1906人だった住民数は、以後50年2576人、60年3092人、70年4620人、80年7199人、90年8625人、2000年1万42人へと増えていった<sup>(注8)</sup>。増加率は逡減しているものの、過去半世紀に人口は4倍になっている。SMの伝統的生業は、家族労働に頼る農牧畜業であるが、それだけでは生存も難しくなっていく。

先住民の孤立ないし統合と関連する外界へのアクセスに関しては、1962年に区と区を貫通し、アメアルコ郡の行政機構と商業活動の中心であるセントロおよびメキシコ州南部の小都市テマスカルシンゴ(Tamazcalcingo)につながる道路が建設され、78年にそれは州政府により拡張・舗装された。毎日1時間おきに、メキシコ市行きのバス(所要4時間)とケレタロ州の州都ケレタロ市行きのバス(2時間)がSMを通る。これは、商品の流通を容易にするとともに、SM外での就業を促した。運賃は毎年値上げされるものの、それでもメキシコ市までの片道の費用は、同市で成人男性が1日に稼ぎ得る所得と同等かそれ以下である。SM内外の短距離移動のための交通手段としては、タクシーが1980年代、小型バス(combi)が90年代に普及するよ

うになる。区の中央広場脇にそれらの発着場がある。電気については、1967年に区に最初に敷設された〔van de Fliert 1988: 83-85〕。以後、平地から山間部へと電線網の整備が進む。2002年12月～03年1月に実施した調査によれば、世帯の87.8パーセントが電気へのアクセスを有していた。

教育に影響するSMの抱える社会的問題として、アルコール飲料の摂取量の多さを指摘できる。これは少なからぬ先住民コミュニティが抱える問題である。SMのオトミーの飲酒癖は、メスチソ住民や政府関係者の間でよく知られている。その深刻さはしばしば過大に捉えられがちではあるが、アルコール依存症の比率も高く、保健関係者によると、肝硬変等の飲酒に起因する病気が成人の死因の第1位を占める。フォックス政権下でSMは、「先住民のアルコール依存の予防と治療プログラム」の試験地域に指定され、2002年6月11日には飲酒抑制キャンペーンのため、大統領夫人が州知事らとともにSMの中央広場を訪れている。

最後に、宗教については、1960年代からプロテスタント系の宗派への改宗者が増えている。筆者の家計調査世帯成員の17.9パーセントが、プロテスタント系の宗派を信仰しているか、最近まで信仰していたと答えている。メスチソの調査世帯はみなカトリックだった。改宗が必然的に信者個々人の生活水準の上昇をもたらすわけではないが、アルコール摂取などの「悪徳(vicio)」はなるべく絶つ、祝事や祭事には参加しないか簡素に済ませる、といったオトミー改宗者に概ね共通する行動様式が与える社会的、経済的影響は無視し得ない。

表 - 1 SMおよび他地域の教育水準『2000年人口センサス』

行政単位		識字率 %		就学率 %		15歳以上学校教育 %				15歳以上平均 就学年数
		6~14歳	15歳以上	6~14歳	15~17歳	無教育	小学校未修了	小学校修了	小学校修了以上	
SM	BARRIO I.	73.4	58.3	71.3	25.0	42.4	32.2	12.3	13.0	3.0
	BARRIO II.	63.1	46.9	64.5	16.0	56.4	24.8	11.1	7.3	2.2
	BARRIO III.	61.8	46.1	71.4	35.5	55.9	22.5	10.6	10.3	2.3
	BARRIO IV.	79.5	63.8	85.8	48.1	38.6	25.6	15.5	20.4	3.7
	BARRIO V.	60.4	49.0	83.4	29.0	48.6	30.2	11.9	9.3	2.4
	BARRIO VI.	71.5	55.5	76.0	23.3	45.8	28.5	14.0	11.4	2.7
	合計	68.6	53.8	75.8	28.0	47.2	27.8	12.8	11.9	2.7
隣接 メスチソ 集落	Donicá	88.8	80.8	89.8	42.9	19.4	38.2	17.7	24.7	4.6
	San Nicolás de la Torre	91.0	84.7	94.4	39.1	15.8	31.5	23.9	28.7	5.0
全国		87.3	90.5	91.3	55.2	10.2	18.0	19.1	51.8	7.3

(出所) INEGI (2001)

### サンティアゴ・メスキティランに おける学校教育の普及

表 - 1 は『2000年人口センサス』の教育指標である。メスチソ人口が多く平地の 区の教育水準が、より周縁的な 区と比べ高いなど、SM内にも相違がみられる。15~17歳の就学率は 区では48.1パーセントなのに対し、 区では3分の1の16.0パーセントである。他地域に対するSMの遅れは明らかである。15歳以上の平均就学年数は全国平均の7.3年に対し、SMでは2.7年に過ぎない。隣接するメスチソ集

落のドニカ (Donicá) やトーレ (San Nicolás de la Torre) と比べても、SMの教育水準は顕著に低い。

しかし、SMにおいても近年、教育事情は改善している。筆者が2002年12月~03年1月に行った調査世帯における就学状況と成人就学年数を、年齢別、性別、オトミー・メスチソ別に、表 - 2 に示してある(注9)。オトミー若年層の間での教育水準の上昇の他に、男女間格差の縮小傾向が読み取れる。中高年層のオトミーの中では、就学経験者は少数派である。たとえば、1960年代以前に就学年齢であった調査世帯の50歳以上成員45名のうち、学校に通ったことがあ

表 - 2 SMの就学状況と成人の教育水準 90の調査世帯

年齢層	オトミー 就学の有無						メスチソ 就学の有無					
	男性			女性			男性			女性		
	N	就学	%	N	就学	%	N	就学	%	N	就学	%
6~14	78	64	82.1	86	70	81.4	4	4	100.0	3	3	100.0
15~17	28	10	35.7	20	6	30.0	3	2	66.7	0		-
18~20	16	2	12.5	29	1	3.4	1	0	0.0	0		-

研究ノート

年齢層	オトミー 就学年数						メスチソ 就学年数																	
	男性 年			女性 年			男性 年			女性 年														
	N	0	1-3	4-6	7-9	10~	N	0	1-3	4-6	7-9	10~	N	0	1-3	4-6	7-9	10~						
15-19	36	4	2	15	12	3	32	3	6	10	10	3	4	0	0	0	2	2	0					
20-24	34	7	3	15	4	5	34	8	7	14	2	3	0						1	0	0	0	0	1
25-29	13	2	3	3	4	1	13	3	5	5	0	0	1	0	0	0	1	0	2	0	0	1	0	1
30-34	12	1	5	4	1	1	19	11	2	3	2	1	0						2	0	0	0	1	1
35-39	10	1	5	3	0	1	13	10	3	0	0	0	2	0	0	0	2	0	2	0	1	1	0	0
40-44	9	2	4	2	0	1	11	9	1	0	0	1	3	0	1	1	1	0	1	0	0	1	0	0
45-49	12	5	5	2	0	0	11	9	2	0	0	0	0						0					
50-54	6	6	0	0	0	0	3	3	0	0	0	0	0						1	1	0	0	0	0
55-59	5	5	0	0	0	0	8	7	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0
60~	8	7	0	0	1	0	15	15	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0					
計	145	40	27	44	22	12	159	78	26	32	14	9	12	1	1	2	6	2	10	1	2	3	1	3
年齢層	%						%						%											
	N	0	1-3	4-6	7-9	10~	N	0	1-3	4-6	7-9	10~	N	0	1-3	4-6	7-9	10~	N	0	1-3	4-6	7-9	10~
15-19	100.0	11.1	5.6	41.7	33.3	8.3	100.0	9.4	18.8	31.3	31.3	9.4	100.0	0.0	0.0	0.0	50.0	50.0	-					
20-24	100.0	20.6	8.8	44.1	11.8	14.7	100.0	23.5	20.6	41.2	5.9	8.8	-						100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0
25-29	100.0	15.4	23.1	23.1	30.8	7.7	100.0	23.1	38.5	38.5	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	50.0	0.0	50.0
30-34	100.0	8.3	41.7	33.3	8.3	8.3	100.0	57.9	10.5	15.8	10.5	5.3	-						100.0	0.0	0.0	0.0	50.0	50.0
35-39	100.0	10.0	50.0	30.0	0.0	10.0	100.0	76.9	23.1	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	100.0	0.0	50.0	50.0	0.0	0.0
40-44	100.0	22.2	44.4	22.2	0.0	11.1	100.0	81.8	9.1	0.0	0.0	9.1	100.0	0.0	33.3	33.3	33.3	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0
45-49	100.0	41.7	41.7	16.7	0.0	0.0	100.0	81.8	18.2	0.0	0.0	0.0	-						-					
50-54	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	-						100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0
55-59	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	87.5	0.0	0.0	0.0	12.5	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
60~	100.0	87.5	0.0	0.0	12.5	0.0	100.0	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0	-					
計	100.0	27.6	18.6	30.3	15.2	8.3	100.0	49.1	16.4	20.1	8.8	5.7	100.0	8.3	8.3	16.7	50.0	16.7	100.0	10.0	20.0	30.0	10.0	30.0

(出所) 筆者の調査による。

(注) 正確な就学年数ないし年齢の得られなかったデータは除いてある。

るのは有効回答の得られた2名のみである(表-2下段)。だが1970年頃(現40~44歳, 45~49歳の層)を境に, 小学校高学年以上の就学経験を持つ成人が増え, 特に女性の就学率が高まるなど, 学校教育は着実に拡大し根付いていく。『人口センサス』によれば1990年時点でSMにおける6~14歳児童の就学率は53.8パーセントに過ぎなかったのだが[ INEGI 1992 ], それ以降の就学率と進学率の上昇には目覚しいものがある。

1. 政府による教育施設の供給と家計の教育支出の削減措置

(1) 先住民学校制度の導入・拡大と中高等学校の建設

革命期の混乱から1960年代まで政府は, 人口密度も低い先住民農村SMの教育水準を上げるために積極的に学校建設に乗り出すことはなかった。50歳以上のオトミー・インフォーマントの多くは「子供の時分には学校はなかった」と語るのだが, 家の近くに学校がないことは彼らに就学経験のない重要な要因であった。非農地も合わせると面積約40平方キロメートルのSMにおいて, 道路網も自転車もない時代には, 学



校が近所がない限り、毎日数キロメートルの道のりを徒歩で往復せねばならなかった。それは、特に山際に住む児童には大きな負担であった。小型バスが中央広場と各区を往復するようになったのは、ここ10年前後のことである。

SM内に最初の学校が建設されたのは、区の中央広場近くに第1学年のみの小学校の建設された1920年前後である。小学校は、当初は教室ひとつで、教員もひとり、1学年のみなど学校として不完備だった。後述する先住民教育課が創設される直前の1975年においても、各区に1校ずつ小学校はあったものの、6学年教える完備校は区にある1校のみであり、残りの学校は1～3学年を受け持つ能力しか備えていなかった。学校の造りも、トタン板を用いた簡素なものであった。SMで最も裕福な一族に属するメスチソ男性は、姉や兄が郡のセントロなど他地域の小学校で6学年を終えたのと異なり、

区の小学校を修了した最初の世代である。それは1970年頃のことであり、卒業生は12名のうち4～5名はオトミーであったという。施設の不備に加えて、SMの小学校教員のほとんどはオトミー語を解さないメスチソだった。中学校、高等学校も、SM内とその周辺村落にはなかった。

だが、1970年代以降、幼稚園から高等学校まで教育施設へのアクセスは改善する。初等教育とその前段階の教育からみると、1972年にアマルコのセントロにINI(全国先住民庁)の支部が創設され、同郡のオトミーのための先住民政策が始まる4年後の76年に、現在の公教育省先住民教育課が設けられた。先住民教育課が管轄する学校には、先住民幼稚園、先住民小学校の他に、0～4歳の児童とその親を対象とする乳児

園および寄宿舍の4つの範疇がある。乳児園は1979年に導入され、幼稚園は先住民教育課のできた76年に「スペイン語化センター(Centro de Castellánización)」として始まった。また、それまでであったSM内の一般小学校は、すべて先住民学校に編入された。先住民学校制が導入された四半世紀後の2001年度には、SM内に13の幼稚園の他、10の小学校、9の乳児園、ひとつの寄宿舍があった。小学校は、区の1校を除いていずれも6学年を受け持っていた。小学校の在籍生徒数の合計1773名に対し教員数は63名であり、平均1人あたり28名の生徒をみていた。ただし4校では教員数が6名に満たず、少なくとも1人の教員が2学年以上を同時に担当せねばならない。

先住民学校の質的な面をみると、その主要な特徴は教員がイダルゴ、メキシコなど他州出身者も含めオトミーであることにある。INI進出後にオトミーが補助教員として雇われ始めるが、一般校が先住民学校に替わると、「オトミー教員によるオトミー児童の教育」が初等教育の方針となる。教育普及の遅れていたSMでは、小学校を卒業し数カ月の講習を受ければ教員になった。他州出身者は中学校を出ていればよかった。彼ら教育水準の低い教員は、教職を続けながらより上級の学校に通った。他州出身者も多いのだが、教員がオトミーであることには、生徒が校内でオトミー語を話しても罰せられない、オトミー語で質問できる、親、特にスペイン語に自信のない母親が訪問しやすくなる、など教育学的観点からは利点がある。これらの利点は、入学時にスペイン語を満足に話せない児童が多く教育への不信が広くみられた1970年代の導入時には、就学を促した。だが、それは二言語人

表 - 3 SMの子供達が通う主な中学校と高等学校 2001年度

	学校名	所在地	設立年	登録生徒数	教員数	クラス数
中学校	Escuela Secundaria Técnica José María Velasco	San Nicolás de la Torre( IV区の近く )	1983	計544名 うちSM出身者は340名	14	9
高等学校	Colegio de Bachilleres del Estado de Querétaro, Plantel 2	アメアルコのセントロ	1984	計520名 SM出身者は30名( 2002 ~ 03年度 )	25	12
	EMSAT( Educación Medio-Superior A Distancia )	IV区 始めは区のビデオ高校として出発	1994	計105名。SMのオトミーが過半を占める	6	4
	CONALEP( Colegio Nacional de Educación Profesional Técnica )	アメアルコのセントロ	1999	計255名 うち97名が先住民居住区出身	20	6

( 出所 ) 学校長等へのインタビューをもとに筆者作成。

口の比率が高まるにつれ減少していく ( 注10 )。

このように教員が先住民であることには利点がある反面、特にSMのように教育の浸透の遅れたコミュニティにおいては、教育関係者も認めるのだが、指導能力の低い者が教員になり得るという欠点を持つ。先住民学校に通ったオトミーの多くは、小卒ないし中卒の教員に学んだ。現在のメキシコでは、原則として大学を修了しなければ小中高等学校の教員になることはできない。小学校教員の場合、初等師範学校 ( Normal [ Básica ] ) ないし国立教育大学 ( Universidad Pedagógica Nacional : UPN ) 等の教員養成大学を修了せねばならない。若い教員ほど学歴が上昇しているものの、今でも教員に占める高校修了者ないし未修了者の比率は高い ( 注11 )。

先住民学校において教員がオトミーであることの最大の意義は、教育上、文化上の機能よりもむしろ、「教育水準の高いオトミーへの安定した雇用機会の提供」という経済的機能にあると思われる。2001年度に先住民教育課のSM地区では、乳児園、寄宿舎も含む先住民学校の教職員として計116名が雇用されていた。SM出身者の割合は高まっており、今日ではその過半を占めるだろう。SM地区以外のオトミー居住

地で働く、SM出身の学校教員もいる。教職員はみな、人事権を掌握する教員の全国労働組合に加入しており、解雇される心配は少ない。ベテラン教員世帯の大半は、雑貨店経営といった副業にも従事している。教員は公共政策へのアクセスにおいても有利な立場にある。SMにおいて彼ら学校教員の家族は、教育の便益を人々に知らしめる存在であった。

中学校以上の教育施設についても、1980年代以降に設置が進んだ ( 表 - 3 参照 )。中学校については、1983年に 区と接する集落トーレに地区初の中学校が開校した。オトミーの生徒は増加傾向にある。1990 ~ 94年度まで209 ~ 239名の範囲におさまっていた登録生徒数は、2001年度には544名まで増えており、そのうち340名がSM出身者であった。トーレの中学校に続いて創設された、ドニカにあるビデオ中学校にも、近所である 区のオトミー児童の多くが通っている ( 注12 )。

高校以上については、アメアルコのセントロに1984年 ( 前身は79年 ) に普通高校が、99年に工業高校が設立された他、SM内にも創立10周年を迎える高校が存在する。セントロの普通高校は3校の中で最も古く規模も大きい。SM出身

の生徒数は2002年度で30名だが、メスチソ世帯やゆとりのあるオトミー世帯は、同校に子供を通わせる傾向にある。工業高校では、地域の工場への就職を意識した技術教育が行われている。

今日では、SM内にある高校に通うオトミーの数が一番多い。同校は、1994年に 区で教員3名のビデオ高校として出発する。1999年には 区に移転し、2000年度にはビデオ教材を使うことがあるものの普通高校に近い、「遠隔地高校(Educación Medio-Superior A Distancia)」に格上げされている。2001年度の登録生徒数は1年生が57名(女子が25名)、2年生が35名(同10名)、3年生が13名(4名)の計105名であった。生徒数は年々増えているのだが、教室数が4つ、教員数が6名と収容能力が追いついていないため、改築中である。2004年度には250名の生徒が登録されている。

高等教育に関しては、2004年夏時点でケレタロ市やサンファン・デル・リオ(San Juan del Río)市 多国籍企業の進出が盛んなケレタロ州の新興工業都市 あるいはケレタロ州外の都市にしか短大と大学はない。SMに留まる限り、交通費の負担は高くついてしまう。

## (2) 家計の教育支出の削減措置

教育を投資としてみると、かかる費用 直接的費用(授業料、学用品代、交通費等)と機会費用 が少ないほどその純便益は高まる。1990年代以降メキシコ政府は、教育施設の供給という役割から一歩踏み込んで、貧しい世帯が負担する教育支出を減らすことにより、通学への誘因を高めようとしている。表 - 4には、SMにおける小学校から大学までの教育に要する主な費用と政府補助をまとめてある。

費用削減措置の中で最も重要なのが

PROGRESAである。PROGRESAは、統計資料から貧困地域を選出し各選出地で定期的に世帯訪問調査を行い、その結果選ばれた貧困世帯に補助を与えるものである。受益者が人的資本の蓄積に努めることが継続の条件とされる。教育に特に関連する項目として、奨学金、食糧のための現金補助、(始業時に学用品配布という形を取ることが多い)学用品補助がある。奨学金については、2002年より高校生も受けるようになった。SMでは1997年に導入され、漸次受益者の数は増えてきた。

90(オトミー84,メスチソ6)の調査世帯における8~20歳の年齢層のうち、21世帯、計40名の就学児童(オトミー20世帯で39名、メスチソ1世帯で1名)が通学を条件に奨学金を受けていた。これは同年齢層の就学者129名の31.0パーセントを占める。また、食糧補助金については、保健講習などの参加を条件に40世帯(オトミー39世帯、メスチソ1世帯)が受けていた。食糧補助金は就学児童の存在を受給条件としないが、奨学金受給世帯は食糧補助金の受益者でもある。食糧補助金と合わせPROGRESAの現金補助は、季節変動の激しい受益世帯の所得の中で安定した部分を構成し、家計の予算制約を緩和する。奨学金に関しては、少数だがSEP(公教育省)の奨学金を受けている者(調査世帯の中では小学生1名)もいる。高校生は全員、交通費補助(月額200ペソ)を受けている(表 - 4)。

受益世帯の母親の多くはPROGRESAのおかげで子供がより長く学校に通うゆとりができたと言っており、担当官によれば普及後に就学率と進級率は顕著に上昇したという。だが、効果を否定する者はいないが、教員ら教育関係者は「奨学金を教育のために使わない親がいる」など、

表 - 4 SMにおける主な学校教育の費用と政府補助 2002年

教育	直接費用				機会費用	
	授業料	教科書	交通費	その他政府補助	機会費用	政府による補助
小学校	無料（学校側が度々「協力費」を求めることあり）	無料	徒歩ないし自転車	VI区の小学校などいくつかの先住民学校では、希望する世帯に月額8ペソで簡易朝食パックを支給（DIF）。校内に食堂を設ける朝食プログラムは、母親の賛同を得られなかったこともあり、未導入。始業時に学用品一式の補助（PROGRESA年125ペソ）。III区にINIとSEPの運営する無料の寄宿舎あり	就学児童は親の仕事場（ex. 農地や路上）ないし家の中で、両親の手伝いを十分にすることが出来ない	PROGRESAの奨学金（月額換算で95～195ペソ）および食糧のための現金補助（同145ペソ）。少数の児童はSEPの奨学金を受取る。
中学校	年150ペソ	貸与可能	居住地に依存。徒歩、自転車ないしバス。1日あたり0～20ペソ	PROGRESAの学用品補助（年235ペソ）	休業期間や土日を除いて、労働市場に参入できず。若い男性にとっての参入容易な職業の代表例である建設労働の場合、見習いで週350～400ペソないしそれ以上稼ぐことができる。女性就業者の多い工場KALTEXでは、一般工の基本給は365ペソ。高校、大学と学歴が上昇すると進学のコストも高まる。	PROGRESAの奨学金（月額換算280～360ペソ）および食糧のための現金補助（同145ペソ）
高校	IV区の高校は年500ペソアメアルコのCONALEPは年570ペソ、アメアルコの普通高校は半年あたり620ペソ。成績優秀者への授業料免除あり。	有料	アメアルコにある高校の場合、1日あたりのバス代往復が18ペソないしそれ以上。高校生には月200ペソの交通費補助あり	PROGRESAの学用品補助（年235ペソ）		PROGRESAの奨学金（月額換算470～610ペソ）および食糧のための現金補助（同145ペソ）
短大・大学	サン・ファン・デル・リオにある技術系短大の場合、4ヵ月あたり850ペソ	有料	サン・ファン・デル・リオあるいはケレタロ市にある学校にバスで通う場合、1日あたり往復48～60ペソないしそれ以上。			各々の学校には奨学金プログラムあり。一定の成績を修めた先住民児童にはINIの奨学金（月額1,000～1,200ペソ）。PROGRESAの食糧のための現金補助（月額換算145ペソ）。IV区の高校卒業生数名は、大学に入った際に奨学金をもらえとの条件でINIの寄宿舎に勤務。

（出所）教員や生徒、政府機関の職員とのインタビューに基づき、筆者作成。



留保付きの評価を下す傾向にある。

筆者が確認できたPROGRESAの問題点として、経済的補助を必要とする世帯に行きわたっていないことが挙げられる。ゆとりのある世帯は選別過程で外されるはずだが、調査世帯の受益者の中には、明らかに生活水準の高いオトミー2世帯が含まれていた。ひとつは世帯主が文房具店を営み妻がイダルゴ州出身の学校教員という世帯であり、もうひとつは2つの雑貨店を運営する世帯である。後者の世帯は、世帯主が大学を中退した32歳の男性であり、過去にPROGRESAの現地調査官として雇われた経験がある。より深刻なのは、多数の貧困世帯が奨学金も食糧補助金も受けていないことである<sup>(注13)</sup>。

受益者の選別が不完全な理由として、3点を指摘できる。第1が季節的移住である。移住を繰り返すオトミー世帯の大半は貧しいのだが、調査官の訪問時に留守であるなど、こうした移動世帯は受益者となりにくい。第2に、SMには公共政策へのアクセスの悪い周縁的な場所が存在する。区や区の山際等の辺鄙な場所の住民はしばしば、インフラの整備からも所得補填的なプログラムからも取り残されている。最後に、オトミー自身が強調する理由なのだが、プログラム履行に関与する者が家族や知人を優遇している可能性がある。「複数の補助を受けている世帯がある」、「運営に携わる各区代表(promotora)は我々を無視している」といった批判を筆者はたびたび、調査世帯や学校教員から耳にした。担当官によるとSMは重点地域のため受益者の数は今後も増えていくというが、受益者数の拡大と同時に的確、公正な選別が求められている。

PROGRESAよりも古くから先住民貧困層を

対象としてきたプログラムとして、INIがSEPと運営する小学生用の寄宿舎がある。SMには区に定員50名の寄宿舎がある。1975年に、完備校として改築される小学校の隣に建設された。寄宿生は平日に寄宿舎で共同生活をし、食事を与えられる他、今日では区の高校卒業生による補習も受けている。しかし、こうした先住民児童のための無料サービスの存在意義は、学校数の増大と所得移転プログラムの普及のため、薄れている。区の寄宿舎の場合、2003年8月時点での登録児童の70~80パーセントは、家庭や学業に問題を抱える近隣集落の児童であった。

## 2. オトミーの社会経済的統合と教育

以上、広義の教育政策の変化を検討した。続いて、教育を受容するオトミー側の変化として、経済の変容およびこれと結びついた教育への期待、関心の変化を論じることにする。

### (1) SM経済の変容

表 - 5は、84のオトミー調査世帯と6つのメスチソ世帯における12歳以上の非就学成員の活動を教育水準別に並べたものである。メスチソと比べオトミーが、農業ないし非農業の場合でも参入が容易で不安定な職種 建設労働や露天商・行商などに就く傾向にあるのが、明瞭である。これは、両者間の生活水準の差となつて現われる。たとえば、世帯成員数を部屋数で割った値は、メスチソ世帯の平均が0.9なのに対し、オトミー世帯のそれは2.5である。

オトミー男性の半数以上が農業を主な仕事だと答えている。だが現在、SM経済の重心は家族経営農業ではなくなっており、村外で得た所得ないし政府からの移転所得や給と支払が村内を循環する経済へと変貌している。

農家の多くが小農それも過小農であるとき、

表 - 5 90の調査世帯における12歳以上の非就学成員の主な活動

	主な仕事 (農業の場合は副業の有無も考慮)	就学年数											
		オトミー					メスチソ						
		0	1-3	4-6	7-9	10-	計	0	1-3	4-6	7-9	10-	計
男 性	農業, 副業なし(家族農業あるいはSM内外での賃金労働)	17	9	13	3		42						0
	農業 + 副業	11	8	9	4		32	1		1			2
	建設労働 (SM内あるいは都市部にて)	7	6	10	6	1	30						0
	露天商・行商, 民芸品	3	4	4			11						0
	レストラン				2		2						0
	工場労働 (繊維工場KALTEXなど)		1		2	2	5						0
	運転手 (バス, タクシー)						0				2		2
	その他肉体労働 (公営市場での荷夫など)		1	2			3						0
	非農自営業 (食糧雑貨店や修理工場経営)	1		2		1	4	1		3			4
	他世帯の非農自営業の(被)雇用者					1	1			1			1
	学校以外の公共部門での(被)雇用者				2		2		1				1
	学校教員 (先住民学校)					3	3						0
	無職			3		1	4						0
	高齢のため引退	1					1						0
	計		40	29	45	18	8	140	1	1	2	6	0
女 性	主な仕事 (農業と露天商・民芸品は不定期の場合も含む)	就学年数											
		オトミー					メスチソ						
		0	1-3	4-6	7-9	10-	計	0	1-3	4-6	7-9	10-	計
	もっぱら家事	46	16	26	4	1	93			1			1
	農業 (不定期の場合含む)	13	4	4			21						0
	露天商・行商, 民芸品 (不定期の場合含む)	15	7	4	3		29						0
	レストラン		1	1			2						0
	女中	1			1		2						0
	工場労働 (繊維工場KALTEXなど)			5		1	6						0
	非農自営業 (食糧雑貨店や修理工場経営)	5	1	2	3		11	1	2	2	1	1	7
	学校教員 (先住民学校)					4	4						0
計	80	29	42	11	6	168	1	2	3	1	1	8	

(出所) 筆者の調査による。

教育は非農部門における雇用の拡大ないし移住という経路を通じて、所得上昇に貢献し得る [ Taylor and Yúnez-Naude 1999 ]。SMのほとんどのオトミー世帯が玉蜀黍とうもろこしを栽培し続けているといえ、その価値は自家消費面にある。筆者による90の調査世帯においては、(不明を除く)農

地面積は最小で0ヘクタール(2世帯)、最大で5ヘクタール(2世帯)であり、平均は1.42ヘクタールであった。農地はあるが0.5ヘクタール以下の世帯が27もあった。二期(毛)作を許さない自然条件、低い技術水準および生産物の価格停滞のため、収量も低い。90世帯のうち、玉蜀



黍の一部でも売ることがあると答えた世帯は16世帯に過ぎなかった。玉蜀黍を自給すらできない世帯も増えている。メスチソ世帯や灌漑地を有するオトミー世帯の中には、改良種子を利用する者あるいは販売用の家畜を飼育する者もいるが<sup>(注14)</sup>、これらの世帯においても家族農業以外の仕事为主要な所得源をなすことの方が多い。『人口センサス』によれば、1970年以降のSMにおける第1次産業部門就業者の比率は、70年の92.5パーセント、80年の88.7パーセント、90年の73.1パーセントを経て、2000年には40.0パーセントまで低下している [ van de Fliert 1988, 100; INEGI 1992, 2001 ] 『人口センサス』の経済情報を鵜呑みにはできないものの、農業の比重が低下趨勢にあることは確かである。

家族農業の限界のため、人々は非農雇用および村外での雇用に活路を見出す。農業を主な仕事と答えた者もその大半は、SM内外での日雇いないし季節農業労働から賃金を得る他、副業・兼業にも従事している。農業従事時間の長い者は、年齢が相対的に高いこともあり、教育水準が最も低くなっている。女性の場合、季節的に都市部の路上で菓子や民芸品を売る、あるいは物乞いが、最もよくみられる現金稼得の方法である。

こうして、その大半が学歴をほとんど要さない仕事をしているにせよ、オトミーの外部社会との経済的統合は深まっている。村外での短期就業は一般的であり、月曜早朝の中央広場前では建設労働に出かける多くの男性がバスを待っている。また、長期ないし永続的な移住への依存度も強まっている。90の調査世帯中少なくとも26世帯において、世帯主ないし配偶者が3カ月以上継続的に国内の他地域に住んだことがあ

る。また、世帯主と配偶者の生存する兄弟姉妹の35.6パーセントが(米国を含む)村外に住んでいる。

オトミーは村内での雇用機会の少なさを慨嘆するのだが、新しい動きも生じている。先住民学校の教職員、村長やINIの事業担当などの政治関係職、警官など、一定の学歴を要する村内公共部門に就くオトミーの数は増えてきた。先住民学校の教員については、次節で教員世帯の事例を紹介するが、小学校教員の半月あたりの給料が2000ペソ(200ドル弱)以上であるなど、彼らはオトミーの中で恒常所得水準の最も高い職業集団である<sup>(注15)</sup>。また、幹線道路沿いに位置するメスチソの店に規模は全般に劣るが、雑貨店や床屋などの自営業を営むオトミー世帯の数も顕著に増えている。1998年以降の筆者の調査期間中にも、家を改築する世帯と合わせ、自営業を始める世帯は広く観察された。

さらに最近の大きな変化として第1に、低賃金労働力を求めて進出した工場での勤務を挙げることができる。こうした工場の代表がメキシコの繊維企業KALTEXである。アマアルコのセントロ口近くに建設された同工場は、1995年に製造を開始した。2002年12月時に約2000名の従業員を抱えていたが、うち1700名は女性だった。90パーセントは一般工である。KALTEXは周辺の広大な農村地帯から、18~40歳で読み書きができる者 これは小学校未修了者でも雇われ得ることを意味する という条件で一般工を募っており、送迎バスのサービスも提供している。SMでは若い女性(既婚者も含む)を中心に、数百名のオトミーがこの新しい雇用機会に惹きつけられた。そのほとんどが一般工である。だが、熟練度に応じた昇給もあるものの、一般工

に支払われる賃金は高いとはいえない<sup>(注16)</sup>。低賃金政策のひとつの帰結は、従業員の入れ替わりの早さである。人事部長によると、勤続年数の長い従業員もいるものの、一般工の平均雇用期間は6～7カ月に過ぎないという。KALTEXに2年間勤務していた、小卒で28歳のオトミー男性の語るところによると、同工場は一時「SMの若者の半分が勤めるほど」人気のある職場であったという。同じく小卒の彼の妻もKALTEXで働いた。ところが、440ペソで始まり一時600ペソにまで上昇した週給は、生産の落ち込みに伴い300～350ペソにまで下がってしまう。このため彼を含む工員多数が辞めたという。彼は現在、建設労働に従事している。その賃金は建設労働者の中では高い方であり、KALTEXと比べ不安定ではあるが、週1000～1200ペソに達した。このように多くのオトミー男性にとっては長く働く価値のない職場であるものの、KALTEXは、若いオトミー女性らには選択肢の拡大を意味した。2003年秋に選出されたSMの現村長は、工科短大卒という、村で初めての高等教育を受けた村長であるが、彼は、

「安定した勤め先が少ないからアルコールの常飲がみられるのであり、ひとつの対策としてKALTEXに工場誘致を持ちかけている」と筆者とのインタビューの中で語っている。

第2に、通勤可能な民間のフォーマルな雇用先の登場に劣らぬ影響力を持つ変化なのだが、米国への不法出稼ぎが急増している。1990年代末より、10代後半～30代の男性を中心に、手配師に700～1500ドル相当を支払っての越境が流行るようになった。それ以前にもメスチソの間では渡米者の比率は高かったが、オトミーの場合は教員の子弟らに限られた現象であった。だが最近では、小学校未修者から高校修了者まで広い層に広がっている。表-6には、出稼ぎ中ないし出稼ぎ経験のある世帯主と子供の就学年数が示してある。オトミー84世帯中12世帯、メスチソ6世帯中4世帯が出稼ぎと縁があった。彼らは建設労働や葡萄園での農業労働等に従事し、同郷者と部屋を借り移動することで支出を節約する。長時間働き、支出を切り詰めれば、週300ドル(3000ペソ強)以上貯蓄できる。帰国後に再度渡米する者も増えている。1～3

表-6 米国に出稼ぎ中ないし出稼ぎ経験のある成員の数と教育水準

年齢	オトミー12世帯					メスチソ4世帯				
	人数		就学年数			人数		就学年数		
	男性	女性	最小値	最大値	平均	男性	女性	最小値	最大値	平均
～19	4	0	4	9	6.5	0	0	-	-	-
20～29	9	1	3	12	7.2	3	2	6	12	9.0
30～39	5	0	0	9	4.8	2	1	9	9	9.0
40～49	1	0	4	4	4.0	0	0	-	-	-
50～	1	0	0	0	0.0	0	0	-	-	-
計	20	1	0	12	6.0	5	3	6	12	9.0

(出所) 筆者の調査による。

(注) 出稼ぎ中の成員は他の図表では世帯構成員に含まれていない。

年間の滞在で得た貯蓄の最大の投資先は住宅であり、自動車や家畜の購入、自営業への投資がそれに続く。親族や隣人を雇い見栄えのよい住宅が建設中の場合、その多くは出稼ぎ者のいる世帯である。

## (2) オトミーの統合と教育への関心、期待の変化

表 - 1 と - 2 に示される中高年層の低い教育水準は、彼らの学歴期におけるオトミー住民の教育への関心と期待の低さを反映していた。中高年層から教育に関して筆者が頻繁に耳にしたのは、「親には、学校に行く代わりに家畜の世話をしよういわれたものだ」という発言である。さらにオトミーは、通常10代でそれも多くは10代半ばで結婚していた。

オトミーは貧しいだけでなく、外部社会から孤立する傾向にあった。都市での就業は20世紀後半に増えていくが、彼らの間では物乞いの割合が高い。その多くは季節移住者からなるのだが、メキシコ市に住む移住者を1970年代半ばに調査した Arizpe (1979) は、オトミーの間でなぜ物乞いする女性や子供が広くみられるのかという問いについて、彼らが外部者に対し抱いてきた不信や疎外感が答えのひとつをなすことを示唆している。Arizpe がオトミーの間では教育への関心も低いと指摘する通り、近年に至るまで教育は外のもの、自分には関係のないものと捉えられがちだった。特に、全工程に数時間を要する手打ちのトルティージャ(挽いた玉蜀黍を原料とする主食)作りも含む家事を任される女性の就学率は低かった(表 - 2)。先述した先住民教育課の任務のひとつは、オトミーの両親の教育への関心を高めることにあった。同課に1970年代の創設時から勤務し続け、現在は監査

官の立場にある女性 彼女自身はイダルゴ州出身のオトミーである の回想によれば、彼女は教員らと毎年実施する戸別訪問等の就学キャンペーンを通じて、親が子供の教育に関心と責任を持つよう促してきた。当初は訪問時に戸を閉められることもあったという。

オトミーの孤立は、優勢言語がスペイン語であるメキシコにおいて、先住民一言語人口であることの不利と結びついていた。スペイン語を操れないことは就業先を限定するだけでなく、教室内でメスチソ児童についていくことを困難にした。中高年層のオトミーの多くは、スペイン語を学校と家庭の外で学んだ。

言語上の不利の他にオトミーの孤立と関連する要因として、隣接村ドニカの住民などメスチソによる差別的言動を挙げることができる。オトミーのインフォーマントによれば、地主の関係者の振る舞いが横暴であった農地改革前には石を投げられたこともあり、改革後も、貧しさやスペイン語を流暢に話せないことにより、「不潔」などとからかわれたり騙されたりしたという。教育水準の相対的に高いオトミーの中年層は多かれ少なかれ、「インディオ(indio:先住民に対する侮蔑的表現)」と呼ばれるなど、当時多数派をなすメスチソの同級生により差別的な扱いを受けた経験がある。

だが、教育行政と地域経済が変容する中、オトミーの教育に対する認識と行動も変わってきた。オトミーの間でも教育への関心は高まっており、学校に行くことが社会規範となりつつある。

現在でも成人の大半は学歴をほとんど要さない仕事に従事しているものの、経済の変容は、教育の必要性を親に意識させることになった。

先住民学校の教員は、その経済的成功が妬みの対象となるものの、高校生やその親ら住民に刺激を与える存在であった。就学経験のないオトミーは遠出の際にバスの行き先を読むことができなかつたが、村外での就業が日常となるにつれ、住民は教育の必要性を認識するようになる。ただし、村外への移住は二面性を持つ。すなわち移住は、家計を豊かにするという意味では児童の教育に貢献するが、それに伴う問題もある。資源を持たぬオトミーが移住先で安定した雇用と住宅を確保するのは容易ではないため、学齢児童を連れて行くならば、彼らの教育には不利に働いた。教育関係者は、これとは違うケースだが、親が子供を残して季節的に移住することを問題としてよく指摘する。

また、女子の就学も進んだ。学齢層の間では男女間格差はなくなりつつある(表 - 2)。メスチソと比べ早婚であった慣習は進学に負の効果を及ぼしてきたが、婚姻年齢も高まっている。調査世帯の15~20歳成員93名中65名(69.9パーセント)が独身であり、うち就学中の者は21名(32.3パーセント)であるが、独身者の比率は今後さらに上昇していくだろう。一方、みなオトミーである非独身者28名の中に、就学者は1人もいなかった。

政府も、教育への関心が高まるよう制度上の工夫をこらしている。PROGRESAの奨学金は受給者に出席を義務付けている他、女子児童への支給額を高め設定している。全く参加しない両親もいるが、小学校から高校まで父母会が設置されている。

言語上の不利も軽減されてきた。オトミー間での二言語人口の比率は、『人口センサス』によると、1980年には65.5パーセント、2000年には

81.1パーセントへと上昇した<sup>(注17)</sup>[ INEGI 1989; 2001 ]。スペイン語の番組を流すTVの所有世帯(住宅)の比率も、全国(85.9パーセント)の半分とはいえ、43.0パーセントにまで増えている[ INEGI 2001 ]。SMの言語状況は、二言語併用、それもスペイン語の比重の高い二言語併用へと移行しつつある。オトミー 84世帯の5歳以上成員の言語能力と言語使用について4つの質問をしたところ、「スペイン語を話すか否か」については成員の5.2パーセントがスペイン語を話さず(全員就学年数は0年)、5.4パーセントが少しだけ話し、残り89.3パーセントは話す、「オトミー語を話すか否か」については4.6パーセント(全員19歳以下)がオトミー語を理解するだけで話さない、オトミー語話者の中で「スペイン語とオトミー語のどちらをうまく話すか」についてはスペイン語の方をうまく話す者が17.5パーセント、スペイン語とオトミー語の双方を話すと答えた者が37.2パーセントであり、両者で過半を占める、オトミー語話者の中で「家でどちらの言語をよく使うか」については、16.9パーセントがスペイン語の方をよく使い17.8パーセントが双方を使うと答え、両者で3分の1を超える、との結果を得ている。回答者の大半は各世帯の世帯主ないしその配偶者だったが、若い成員ひとりひとりに聞いていたならば、オトミー語離れの兆候がよりはっきりと現れていたはずである。教育水準の高い層であり若者の代表的なサンプルとはいえないが、2004年2月に、区高校の3年生31名に書き込み式の質問票調査を実施した。その結果は、親のいずれかがオトミー語を話すオトミー世帯に属する20名の生徒のうち、2名はオトミー語を話さない、(解答は「両方」も含む3択形式)



言語能力の比較については、オトミー語を話す18名の生徒のうち2名が「スペイン語の方をうまく話す」、残りの16名が「双方を話す」、(解答は「両方」も含む3択形式)家での言語使用については、18名の生徒のうち6名が「オトミー語の方をよく使う」、2名が「スペイン語の方をよく使う」、9名が「双方を使う」(1名は無回答)、というものであった。他の多くのオトミー・コミュニティが辿ったように、SMにおいて今後数十年のうちにオトミー語が急速に衰退していく可能性も否定できない(注18)。

先住民一言語人口であることの不利は明白な一方、二言語人口であることが学校教育に不利をもたらすかは、スペイン語に晒される時期や時間の長さ、受けた教育の年数や性質次第である。スペイン語(のみ)を母語としないことが何ら不利を及ぼさないことも、あり得る(注19)。スペイン語の使用人口と使用領域の拡大につれ、学齢児童にとっての不利は減少している。筆者は、小学校から高校まで複数の教員に「オトミーの生徒はスペイン語の能力に問題を抱えているか」と質問してみたが、その回答は、「問題を抱えていない」か「(発音や語彙力など)抱えていても学業に支障を来たしはしない」というものだった。先住民小学校においては、低学年児童の中に難のある生徒がいるものの3年生になる頃にはそれを克服する、と教員は答えている(注20)。SMの境界部に住むオトミー世帯の多くは、先住民小学校という選択肢があるにもかかわらず、教員がメスチソである一般校に子供を通わせている(注21)。隣接集落ドニカの小学校の場合、校長によると157名の全校生徒のうち53名が区か区のアメアルコのセントロ

という。

オトミーにつきまってきた差別についても、オトミーのインフォーマントは「今日ではなくなった」か「減ってきた」という。それは、スペイン語で対抗することができるようになり、メスチソ同様に雑貨店を開く者や米国に渡る者が増えていることなど、自分達への自信の表れでもある。数十年前とは異なり、今日では区の小学校も含め、オトミー児童が校内で多数派を占める。筆者は区、区、区、区、ドニカの小学校および区とアメアルコのセントロにある高校において、副校長らに差別の有無を訊ねた。その結果、メスチソ児童の多い区の小学校教員のひとりが「スペイン語をうまく発音できないオトミーをメスチソがからかうことがある」と語ったが、それ以外、校内におけるオトミーへの差別は存在しない、との回答を得ている。セントロの高校の副校長によると、「オトミーの生徒は初め大人しい(tímido)が、次第に慣れてメスチソとうまく共生する」という。とはいうものの、メスチソによる差別がなくなったわけではない。たとえば、校長はそのような事実はないと否認したものの、2003年にドニカの小学校に通っていた区のアメアルコのセントロのオトミー児童は、メスチソ児童に差別的ないじめを受けたため同校への通学をやめたと語っている。また、後述する高校卒業生ロベルトは、トーレの中学生だった時、彼が先生と仲良くしているのを気に入らないメスチソの同級生に「インディオ野郎」と罵られ、殴り返した経験があるという。敵対しているわけではないが、小学校から高校まで校内ではオトミー児童とメスチソ児童は別々のグループを形成し行動する傾向にある。だが、メスチソ側の優越感やオトミーとの社会的距離

は存在するにせよ、差別が就学に与える影響は減少しているといえる。

以上のように、教育の普及を促す政策と移住や言語移行を含む社会経済的統合に伴い、オトミーの間でも学校教育への関心は高まる趨勢にある。だが、個々の世帯の置かれた状況により幅のあることに注意する必要がある。また、教育水準の上昇が職業機会をどれだけ広げ得るのかも、オトミーにおける教育への期待と関心の定着に影響を及ぼす、大事な論点である。

### 3. 異なる世帯と個人の事例の検討

以下では、SM住民の間で学校教育がどのように受容されてきたのか、それが彼らの行動にいかなる影響を与えてきたのかを理解することを目的に、異なる特徴を示す5つの世帯ないし個人の事例を取り上げる。最初に、教育の導入期に通学した珍しいオトミーの例として、オトミーで初めての学校教員となった高齢男性のケースを紹介する。続いて、SM内部での教育機会の格差とそれがもたらす職業機会の格差の実像に迫るため、世帯主の年齢が40歳前後のメスチソ1世帯にオトミー2世帯の事例を比較する。最後に、高校卒業生の職業展望という、教育のさらなる普及にとって重要な問題を検討するため、苦学の末に高校を卒業したオトミーの若者の例に焦点をあてる。

家のそばに学校があったとしても不完備の小学校であり、学校教育がよそよそしい存在であった時代にも、少数ながら通学したオトミーがいる。彼らは総じて、区の中央広場近くなど情報へのアクセスのよい場に住む、舗装道路のない時分に都市に出た経験があるなど、外部社会の動向に敏感な人々であった。また、これは現在まで続いている傾向であるが、教育上の達

成は学校教員や政治職など公的部門の仕事の機会に結びつく傾向にあった。さらに、社会経済的上昇を遂げたオトミーは一般に子孫に高い教育を与えてきた。

表 - 2の50歳以上のオトミー就学経験者2人のうちひとり、区に生まれ区に移り住んだ60歳の男性であり、中学2年までメキシコ市にて勉強している。農地を耕し家畜を飼う傍ら、定期的にメキシコ市に赴き建設労働者として働いてきた。8人の子供のうち4人は学校教員となっている。もうひとりの就学経験者は区に住む55歳の女性であり、寄宿舎の職員など後述する先住民学校の教職に就いてきた。また、故人のため世帯調査の中では成員と数えられていないが、小学校を卒業し数期にわたり村長の座につくなど複数の政治職を歴任した人物がいる。立場を身内のために悪用したとの評判も聞かれるのだが、この故人は区の小学校建設など様々な事業を政府に申請した。2人の子供がいるが、息子は中学校の教員であり、娘も中学校を卒業している。息子の妻は夫の家族の支援を受けつつ教員となり、区の小学校の校長をしている。

世帯調査には含まれていないが、以下にみるエンリケ(仮名)の人生は示唆に富む。SMで最初に教職に就いたオトミーであり米寿を迎えたエンリケは著名な人物であり、彼の赴任をSMでの学校教育の始まりとみなすオトミーも多い。教員になることはオトミーにとって数少ない上昇の経路であり、エンリケは学校が一般校の時代に教員となった先駆者である。また、彼の教育現場での経験は、当時のオトミー児童の置かれた状況も物語る。



(1) 教育普及過程の初期に学校に通ったオトミー オトミー最初の教員Enriqueの事例

エンリケは、1916年に 区で生まれた。造りは古いが広く玉蜀黍の十分な蓄えのある家は、中央広場の脇に位置する。エンリケの父は、農業の他に土瓶の行商にも従事していた。農地改革以前には、エンリケは兄弟と共に付近の大農園で農業労働者として働いた。12歳のときにエンリケは、読み書きのできる男の誘いでメキシコ市に行く。帰省するとSMは農地改革の波に飲まれる。参加しないオトミーもいたのだが、彼の家族は1932年に農地の再分配を受けた。改革の後、スペイン語の知識のあった彼は村外にある寄宿制の学校(internado)にて小学校を終了し、さらに教員養成校(修了はせず)で教育を受ける機会に恵まれる。寄宿制学校での教育には他地域の先住民が多数参加しており、規律は厳しいものだったという。高い学歴を有する成人として、エンリケは1942年にオトミー最初の教員に選出される。電気も水道もない時代であった。 区はまだSM唯一の小学校(第1,2学年のみ)に赴任し27年間同校で、9年間新設された 区の学校で、教鞭を取った。校舎の建設にはエンリケ自らが汗を流したという。

次第に意識は変わっていくものの、エンリケが教員であった当時は、子供を学校に送るのは時間の無駄と考える親が多かった。オトミーの子供達はもっぱらオトミー語を話したという。彼が教え始めた当初は、女子生徒はいなかった。オトミーが教員であることを知り女子生徒が現れるのだが、エンリケは裸足の彼女達に草履を買うよう勧めたという。授業では原則としてスペイン語を用いたものの、特に女子生徒に対し

ではオトミー語を使うこともあった。

エンリケは、彼の世代のオトミーとしては珍しく、メスチソ女性(74歳)と家庭をもうけている。子供達は教育水準が高く、移住した者が多い。息子のひとは医師である。2002年9月時点で息子のひとは15年間、娘のひとは11年間ほど米国に住んでいたが、出稼ぎに発った時期や居住期間の長さはメスチソ世帯のそれに近い。メスチソ女性が母親であることも手伝って、子供達はほとんどオトミー語を話さない。エンリケは村長も務めた経験がある。1978年の退職後、彼はその功績を公教育省により表彰されている。

エンリケの就学時から3世代を経た今日、就学率と進学率は上昇している。だが、すべての世帯にあまねく改善がみられるわけではない。大半のメスチソ世帯と先住民学校の教員世帯が一方の極にあるとすれば、低い教育水準と貧困が世代間で再生産されるオトミー世帯がもう一方の極をなす。メスチソ世帯の事例からみてみたい。メスチソ世帯も多様であり、以下紹介するアントニオ家が典型とはいえない。だが、教育水準の高いこと、および非農自営業や米国での出稼ぎ労働に就いてきたことは、オトミーと比較したメスチソの特徴を表している。

(2) メスチソ世帯Antonio(アントニオ)家の事例

アントニオは38歳のメスチソであり、33歳の妻と3人の子供と 区に住む。家は、SMのメスチソ世帯が集中する、 区と 区を縦断する平地の州道沿いの一角にある。隣に彼の80歳になる父親が母親と住んでいるが、2人とも学校に行ったことはない。両親は、顧客の多くはオトミーだったのだが、雑貨店経営と地酒のブル

ケー売りに従事してきた。アントニオの11人の兄弟姉妹はみなSM外に住んでおり、彼の妻の兄弟も5人のうち4人は米国に、ひとりとはドニカに住んでいる。アントニオの最終学歴は中学校卒業である。まだトーレに中学校がなかったため、アメアルコのセントロの学校に通った。妻は創設まもないトーレの中学校に2年間通学した。

アントニオ家の生活水準は、オトミー世帯と比べると格段に豊かである。コンクリート製2階建ての家屋は水色に塗られている。TV3台に、大半のオトミー世帯には手の届かない消費財である、自動車、洗濯機、冷蔵庫、コンピューターを各1台ずつ所有している。

アントニオは様々な職に就いてきた。一定の学歴あるオトミーでも雇われることがあるが、電気公社などの政府部門で働いてきた。これまでに5回、のべ4年間ほど米国に出稼ぎに行っている。米国では衣服の裁断、農作業、家具製造などの仕事に従事し、週300ドル程度の所得を得ていた。現在の主業は、事故で亡くなった兄から引き継いだ個人タクシーの運転手である。収入は月6000ペソかそれ以上になる。副業として妻と一緒に、米国製の化粧品をメキシコ市で購入し、地元で売っている。農業については父親が灌漑農地を4ヘクタールほど所有しており、玉蜀黍を栽培している。父親は、貸出すことで収入を得ることのできるトラクターも所有している。SMでは少数派だが、この4年間、改良品種を試している。伝統種だと収量はヘクタールあたり1~2トンなのに対し、改良品種だと5トン位獲れる。アントニオも農作業を手伝うのだが、販売後の利益は2000ペソ(自家消費分とトラクター賃貸収入は含めず)しか残らないとい

う。村内では有利な条件下にある同家の例は、家族農業の現金稼得手段としての限界を示している。

オトミーとも分け隔てなく話すアントニオは、数日にわたり 区副村長の書記(無給)を務めている。政府に、学校や道路の修繕、講堂の建設、ポンプの設置などを陳情してきた。収入源としては重要でないが、親族と音楽バンド(grupera)を結成しており、シンセサイザーを祭りや祝事の際に演奏している。

3人の子供の教育に関しては、16歳の長男は高校1年生、13歳の長女はトーレの中学2年生、11歳の次女は中学1年生と、全員就学中である。長男は、学費が 区の高校よりも高いアメアルコのセントロにある普通高校にバスで通っている。大学に進学し情報学を勉強したいという。アントニオも、「職を転々とした自分のように苦労して欲しくない」との思いから、子供の教育には関心を持っている。

オトミー内において上位の社会経済的地位に位置するのが、学校教員の世帯である。教員の所得の高さは、教員世帯の住宅がメスチソ世帯の住宅と同じような外観を呈していること、多くが自動車を所有していること、に反映されている。子弟の教育水準に関しても、大学進学者の比率が高いなど、教員世帯は抜きん出ている。以下にみるペドロ家は、能力はあるものの家庭環境には恵まれないオトミーが、先住民学校の教員というコミュニティでは稀少な雇用機会を得たことを梃子に、著しい社会経済的上昇を達成した家族の例である。

(3) 先住民学校の教員Pedro(ペドロ)家の事例

ペドロは1960年生まれの小学校教員である。

現在は、アメルコ郡の先住民教育課の職員として、SM地区の先住民学校の運営評価業務に携わっている。彼は、区中央広場から徒歩2分の所に住むオトミーの両親の間に、男性6人、女性3人からなる10人兄弟の2番目の子として生を授かる。両親は学校に行ったことはない。ただし、ペドロいわく農業では先がみえないため、子供達には学校に行くよう勧めたという。だが、同居する父親は彼が15歳のときに原因不明の病気にかかり、今日までずっと仕事に就けないでいる。母親とも21歳のときに死別している。

入学時にスペイン語をうまく話せなかったペドロは、苦学の末に小学校を修了する。6年生のときは区の学校に通い、できたばかりの寄宿舎も利用している。修了後は学資が足りないため中学校進学をあきらめ、17歳で同い年で就学経験のない妻と結婚する。彼の人生の転機となったのは、メキシコ市で働いているとき、小卒で教員になれるという話を聞いたことにある。19歳でペドロは先住民小学校の教員となる。学歴を高めるため、午前9時から12時まで小学校で教えつつ、午後3時から夜遅くまでテマスカルシンゴにある中学校の夜間部で勉強した。中学校修了後は休業期に初等師範学校に通い、修了資格も得ている。彼は妻の助けを借りつつ、病気の父に代わって弟と妹を養い学校に通わせた。2人の弟はペドロにならい、先住民小学校の教員となっている。他の兄弟姉妹はメキシコ市、チワワ、グアダラハラに移住している。

ペドロ家の生活水準はオトミーの中では最も高い部類に属する。家は2階建てコンクリート製で、自動車に、コンピューター、洗濯機、固定電話も所有している。4人いる子供達の教育

水準も高い。長男と長女は国立教育大学で勉強中の先住民学校の教員であり、長女は同じく先住民学校の教員であるマサウア(mazahua)の夫とメキシコ州に住む。次男は、高校を卒業するほどなく米国に出稼ぎに行った。二女は中学生である。子供達はみなオトミー語を話す。最年少の二女は兄や姉ほどは話せない。教員世帯の中には子供達にオトミー語が伝達されない世帯もあるのだが、ペドロ家の場合、妻が家の中でよくオトミー語を用いる他、先住民学校教員の家族として先住民言語が「資源」となり得ることを認識している。

ペドロは、福利手当を除いて月額5000ペソを超えるだろう教職からの定期収入以外にも、複数の収入源を持っている。週末には、娘婿らと結婚式など祝事用のテント張り・音響機材の設置業に従事しており、1件あたり1800~3000ペソを得ている。妻と娘は日曜日に、中央広場の青空市場にてプラスチック製品を売っている。農業については1.5ヘクタールの灌漑地を有しており玉蜀黍を栽培しているが、鮮度のいい食材を味わうという自給用である。2003年には、店を構えるため中央広場の一角の土地を購入している。

仕事を離れても、ペドロは活動的な人物である。アントニオ同様、音楽好きの息子や兄弟とバンドを結成し、演奏活動も行っている。また、2003~04年度の2年間、娘が通うトーレの中学校の父母会代表にも選出され、改築などを政府に申請している。2003年には村長選に立候補したが敗れている。

ペドロ家のような上昇を遂げたオトミー世帯のある一方で、SMの中でも周縁的とみなされる場所に住む世帯、親がアルコール依存症など

疾病中であるか病死した世帯、子供達を連れて移住を試みたものの職と居住地を転々としてきた世帯などでは、教育水準が低く留まってしまいがちである。表 - 2 からは、少なからぬ若者が依然として小学校を修了していないことがみてとれる。90の調査世帯中、教育の普及から最も隔たっているように見える世帯として、6～20歳の年齢層の6名も含め、2003年1月時に14名の成員のひとりとして学校に行ったことのない世帯があった。この世帯は、教育水準の最も低い区(表 - 1)の最上部に住む。共に46歳の夫婦に7人の子供、2人の義理の娘、3人の孫からなる。農業で生計をたてており、4名の男性成員が、世帯主の所有する2ヘクタールの農地で玉蜀黍を栽培し少数の家畜を飼育する他、近くのメスチソ集落ないしグアナファト州に農業労働に出て収入を得ていた。ただし、健康に優れない世帯主は満足に働くことができない。家の中でスペイン語を聞くことはない。さらにPROGRESAも含め、この世帯はいかなる政府支援も受けていなかった。

以下紹介するフランシスコ家は、必ずしもオトミーの中で最貧世帯ではないのだが、季節的移住への依存度が高く、経済的には貧しい。SMにおける教育水準の底上げは、フランシスコ家のように健康であるものの貧しい世帯、および彼ら以上に周縁的で教育への期待も低く留まっているオトミー世帯がどこまで子供達の進学率を上げることができるかに、かかっている。

(4) 貧しいオトミー Francisco(フランシスコ) 家の事例

区に住むフランシスコ家では、37歳で市場の運搬夫をしているフランシスコ、35歳の妻に5人の子供はみな同区で生まれ育った。全員オ

トミー語とスペイン語の双方を話し、家の中でも2つの言語が使い分けられている。フランシスコの家族は移住への依存度が高いのだが、移住先でもSMでも生活は苦しい。中央広場まで小型バスで10分強の所にあるフランシスコの家は2部屋からなり、材質は煉瓦の壁にトタンの屋根、床は土である。所有する耐久消費財は、ラジオ2台、ベッド2脚、自転車2台程度である。

フランシスコは、父親が25歳で亡くなったこともあり、「孤児」のような状態で育った。6人の弟と妹は、1年の大半をメキシコ市で過ごす。妻には7人の兄弟姉妹がいるが、2人はメキシコ市に、ひとりにはケレタロ市に住んでいる。スペイン語を満足に話せないフランシスコの母親は、息子2人、娘ひとりと首都連邦区の不法占拠地に住んでいる。この占拠地には、20のオトミー移住者世帯が密集して暮らしている。母親はホテルの前に座って自ら作った民芸品を売っている。玉蜀黍の収穫時や年中行事の際には、メキシコ市の家族は区に帰る。

フランシスコの所有農地は、オトミーの中でも小さい0.1ヘクタールの灌漑地のみであり、玉蜀黍を自給することもできない。家畜も、七面鳥2羽に鶏の子供9匹に過ぎない。フランシスコは小学2年までしか通学せず、妻には就学経験がない。生計を立てるため、フランシスコはメキシコ市で単純労働に従事してきた。3年強の間、妻と子供達を連れてメキシコ市に住んだ経験があるが、最初は家賃の安い部屋を転々とし、後に母親の住む占拠地に滞在した。メキシコ市では家を確保するのが難しい上、児童のシンナー吸引など環境が悪いため、住み続けるには適さないという。フランシスコの職業は、メ



キシコ市の公設市場における運搬夫（diablero）である。15歳の長男も一緒に働いており、隔週ごとに計1500ペソ、よいときで2000～2500ペソを持ち帰る。妻もメキシコ市滞在時には民芸品を作り路上で売るが、SMではもっぱら家事に励んでいる。17歳の長女はKALTEXに1年間勤務しているが、基本給は週380ペソという。

13年前にフランススコ家は母親らと一緒に、SMで最も信者の多いプロテスタント系の宗派に改宗している。家の近くに教会（templo）があり、信者仲間と定期的に聖書の勉強会をしている。妻は信者女性に特徴的な頭巾をかぶっており、多くの隣人や移住者の飲酒癖には批判的である。

子供の教育水準については、所得上の貧困に加え移住が学業に悪影響を及ぼした。17歳の長女と15歳の長男の学歴は、同世代のオトミーの間では必ずしも低いとはいえないのだが、区の小学校修了である。下の3人の子供達は、年数が遅れているものの小学校に通っており、13歳の次男は6年生、11歳の三男は5年生、9歳の四男は3年生である。生活水準が高い故に除外されているアントニオ家、ペドロ家とは異なり、本来受給資格があるにもかかわらず、フランススコ家は2003年1月時点までPROGRESAの奨学金も現金補助も受けたことはない。彼らは何か不正があったのだと睨んでいる。

教育の意義は経済的収益に尽きるものではない。だが、貧しいオトミーにとって見返りは重要である。ここで問題なのは、教育水準の上昇が職業機会の拡大に直結しないことにある。この点に関連して、最後の事例として高校生への進路に言及してみたい。全国平均、特に都市部に比べその比重は顕著に低いが、高校進学者の数

はSMでも急速に伸びている（注22）。彼らにどのような展望が開かれているのかは今後の教育水準の上昇を左右する。

地元の高教員が「今では短大か大学に行かないと収入のいい仕事につけない」と語るように、メキシコの労働市場は高校修了に高い評価を与えなくなっている。またオトミーの場合、フォーマルな仕事に関する情報やコネにおいてメスチソに劣りがちである。オトミーが最も多く通う区の高校についてみると、2002年夏時点で同年の卒業生13名のうち、5名が大学（1名が州立大学、4名が技術系短大）に入学している。だが、生徒数の増えた翌年の卒業生33名のうち、そのまま進学できたのは3名に過ぎなかった。非進学者の中には、親族らを頼り都市に移住する者、渡米する者、工場に勤める者、試験を受けて正規の警察官になる者、進学の見込みなし就職先を探しつつ建設労働等の単純労働に従事する者、などがある。進学希望者への救済措置として、CONAFE（Consejo Nacional de Fomento Educativo：国立教育促進審議会）のアメアルコ事務所は、2～3年勤めれば大学生用の奨学金を与えよとの条件で、区高校の卒業生を雇用している。2004年2月時には8名のオトミー卒業生が、ケレタロ州に5つある寄宿舎で補助職員として働いていた。

以下では、高校卒業生ロベルトの苦闘を紹介する。彼は貧しいオトミー家庭に育ちながらも、区の高校を無事卒業する。新しいことへの挑戦意欲はあるのだが現実には厳しい。

#### ⑤ 高校卒業生Roberto（ロベルト）の事例

ロベルトは、2003年夏に区の高校を卒業した21歳の独身男性である。長男で4人の弟がいる。祖母と暮らしてきたため、若者の中ではオ

トミー語を流暢に話すことができる。KALTEXに勤務するオトミーの恋人がいるが、まだ結婚する気はない。家は中央広場から歩いて30分強の区の山際にある。道を3分ほど降った所には村長を経て州会議員にまで昇りつめたオトミーの豪邸が建設中だが、ロベルトの家や近所の家は貧しい。0.75ヘクタールの天水農地 付近の灌漑農家から農業用水を購入することもある から収穫した玉蜀黍は自給用であり、家畜の数と質も、玉蜀黍の実や茎を与えるため自ずと限られる。就学経験のない両親は、農閑期にメキシコ第2の都市グアダハラハラの路上でポテトチップを売る、農繁期に近隣のメスチソ集落で農業労働に励むことで現金収入を得てきた。最近グアダハラ郊外に40平方メートルの土地を入手したのだが、建設資材を購入するお金がない。

今日では、ロベルトのように貧しいオトミー家庭出身の高校生も珍しくない。だが、遅れて高校を終えているように、貧困は勉強を続けるのに不利に働いた。ロベルトも、通学ないし日曜日にサッカーをする以外の時間は家計に貢献してきた。畑の手入れや豚の世話の他に、区に住む富裕なメスチソ高校教員の家で農業労働を手伝ったり、建設労働の見習をしてきた。両親が不在の間は、彼が家に残る弟の親代わりとなった。16歳になる弟のファンは、小学5年生のときに学校に行くのをやめている。11歳の弟フェルナンドも通学を一時やめていたが、2003年度より3年生として復学している。

このようにロベルトは逆境にもめげずに高校を修了したものの、多くの同級生同様、卒業後半年を経て進学先も就職先も見出せないでいる。進学願望はあるのだが、メキシコ州にある公立

の農業大学の受験には失敗している。できるなら生活拠点のあるグアダハラハラの大学に行き、学費の半分は自分が稼ぎ、残りの半分は父に出してもらいたい。進学が無理ならシカゴに住むらしい従兄弟のように、国境を不法に越えることも視野に入れている。米国での雇用機会を広げるため、中学と高校で学んだ知識では物足りない英語力を付けることにも関心がある。SMにとどまる限り、仕事もないし英語を磨く場もない、とロベルトは嘆く。科目の中では農学が気に入っており、中高の恩師から習った野菜の温室栽培をSMに導入したいと語るが、突破口になり得ると彼が期待する近代的農法は多額の初期投資を必要とする。

2003年末からロベルトは2カ月間、グアダハラに滞在した。従兄弟宅に泊まってポテトチップを売る合間に、就職先と英語学校を探した。職については、SMでは目にする事のない新聞の求人広告欄を読み、卒業生にも前例のある、スーパーの店員職 初任給週900ペソ に応募している。それまではファンが最近勤め始めた工場で短期間働く予定だが、高卒でも一般工採用であり賃金は週400ペソ弱である。

## 結論

世界各地で先住民の貧困削減や権利拡大が説かれている今日、先住民の教育水準の低さは克服すべき重要な課題といえる。本稿では、先住民問題が大きな関心を集めるメキシコのひとつの先住民コミュニティにおける学校教育の普及過程を論じた。コミュニティの歴史的個性を明らかにした上で、住民が外部社会との相互作用の中で、教育をどのように受容していったのか



を解明した。相互作用において教育に直接かわるののは、教育施設の建設と拡充、家計の負担する教育の直接費用と機会費用の削減措置など、広義の教育政策である。だがこれら以外に、オトミーの市場経済への統合や非先住民（メスチソ）との関係変容も、就学の決定に影響を及ぼす。

事例に選んだサンティアゴ・メスキティラン（SM）は、2000年に1万の人口を有し、その9割がオトミー語を話す。過去には、大農場での農業労働を除いて外部社会との接触は限られていた。だが、面積を倍加させ一時的にせよ経済基盤を強化した農地改革を経て、20世紀後半、とりわけ近年に入り、政府による様々な公共政策の実施、人口増加に伴う家族農業の限界の露呈、移住の増加と非農雇用の重要性の高まり、二言語併用への言語移行など、多次元にまたがる変容を経験している。オトミーの間では教育の普及が、SM内外に住むメスチソと比べてだけでなく、先住民全体の平均と比べても遅れた。だが1970年代以降、特に過去10年の間に、就学率と進学率の上昇がみられる。

本稿の主な結論として2点を指摘できる。第1に、教育をオトミーよりも早くから受容し、非農自営業など高い所得をもたらす活動に先に従事する傾向にあったメスチソ住民との相違は、オトミーの貧困だけでなく、彼らが「先住民であることの不利」によっても説明できる。それは、スペイン語を十分に操れないこと、差別的言動の被害者となること、過度の飲酒などを含むが、一言でいうならば外部社会からの孤立（排除）を意味した。オトミーの間で教育の必要性が期待として、規範として、徐々に認められていったのは、先住民政策とも組み合わさった

教育政策の深化、さらには非農雇用の拡大や都市部への移住などを通じて孤立が徐々に減じてきたこと、の結果である。

第2に、先住民内に限ると、内部格差を伴いつつ教育が普及していったことが分かる。教育普及の初期には、移住経験を生かした者や公共政策へのアクセスのよい者など、少数のオトミーだけが学校に通った。上昇を達成した者は子供達の教育を後押しした。公平という観点からみると、政府の活動には、先住民学校の教員や政治職に就く者の社会経済的上昇など、オトミーの分化を促す面があった。最近では、貧しい家庭に育ちながらも高校を修了するオトミーの若者が現れるようになり、かつ、男女間の格差は消滅しつつある。地元での雇用機会の不足という慢性的な問題はあるのだが、教員ら公務員や非農自営業者が増えている他、米国への出稼ぎや工場勤務などの新しい就業先も見出されるようになった。だが、これらの変化の陰で、山際などの周縁部に住む世帯、季節移住を繰り返す貧困世帯や親がアルコール依存症の世帯など、低い教育水準が再生産される世帯も少なくならず存在する。彼らは、学校教員の世帯ら教育機会を巧みに活用し上昇を遂げた者と比べ「声なき」人々であり、本来必要であるのに政府支援が届かない場合が多い。教育政策は近年、先住民ら貧困層の状況改善に力点を移しつつあるが、コミュニティ（貧困層）内部における格差にも敏感であらねばならない。

（注1）1970年度には先住民幼稚園はなく、先住民小学校についても1403校に11万6054人の児童が登録されているに過ぎなかった。だが、2000年度には先住民幼稚園は8487校、児童数は29万2031人に、小学校はそれぞれ9063校、79万2399人へと増えている

(<http://www.sep.gob.mx/work/apps/nacional/index.html> 2003年6月アクセス)

(注2) 関心の近い先行研究として、1920～60年代の教育普及過程を検討した米村(1994)がある。

(注3) 『1990年人口センサス』によれば、SMの15歳以上人口の中で、無教育の者は57.4パーセント、小学校未修了者は28.8パーセント、小学校修了者は6.9パーセント、それ以上の教育を有する者は6.9パーセントだった。同年の先住民の全国平均はそれぞれ37.0パーセント、32.7パーセント、13.8パーセント、12.3パーセントであり、SMの教育水準は先住民平均を下回る [ INEGI 1992; 1993 ]

(注4) INIは、先住民政策の立案・遂行のため1948年に設立された連邦政府機関である。従来SEPとの関係が深かったが、92年にSEDESOL (Secretaría de Desarrollo Social: 社会開発省) に統合される。2003年には「全国先住民開発委員会 (Comisión Nacional para el Desarrollo de los Pueblos Indígenas)」へと改組された。

(注5) この世帯調査は、2002年12月～2003年1月にかけて、筆者および調査助手の現地高校生3名により実施された。91すべての訪問世帯において筆者が質問票を用いて質問をした。世帯の成員ひとりひとりに聞いたわけではない。世帯の分布資料の欠如と時間上の制約のため、無作為抽出は困難であった。このため「次善の」策として、6つある区ごとに集計化された『2000年人口センサス』のデータを参照しつつ、地図を手に隅々まで歩き、かつ住宅の外観(材質など)から経済状況がなるべくSM全体の縮図となるように世帯を選ぶよう心がけた。調査時に移住中の世帯や飲酒中の世帯、および回答を拒否した18世帯は、含まれていない。91の調査世帯のうち6つをメスチソ世帯としているが、これは、世帯主とその配偶者ともにオトミー語を話さない世帯のこと(区5世帯、区1世帯)を指す。本文中では、調査時には農地を耕しに帰っていたものの、1年の大部分を他市で過ごすひとつのオトミー世帯が除かれている。このように本調査は代表性という点では問題があるものの、SM内の地理的、経済的多様性は捕捉している。

(注6) SMの政治組織は植民地期から存在したの

だが、革命以降、政府の公共政策の受け皿としての制度化が進んだ。村役場は1983年に創設された。3年に1度村長と各区を代表する副村長が、立候補者の中から村会での選挙により選出される。村町と彼を補佐する書記や出納係は給料を受取っているが、副村長と彼らの協力者は原則無給である。役職者の選挙制は1994年に導入されたのだが [ Prieto y Utrilla 2000: 34 ], それ以前には郡政府が有力者を指名してきた。

(注7) 筆者が世帯調査をした84のオトミー世帯の中で、SM出身のオトミーではない成員を含む世帯は3世帯に過ぎなかった。

(注8) <http://mapserver.inegi.gob.mx/dsist/ahl2003/> (2004年4月アクセス) より。

(注9) 『2000年人口センサス』によれば、SMの15歳以上人口の就学年数は0年(無教育)が47.2パーセント、1～6年(小学校未修了と修了)が40.6パーセント、7年以上(中学校に1年以上通学)が12.8パーセントとなっている。これに対し、筆者の調査サンプルにおいては、0年が36.8パーセント、1～6年が42.0パーセント、7年以上が21.2パーセントとなっている。このように調査サンプルでは、『人口センサス』よりも教育水準が高くなっている。この違いは、ひとつには調査時期が2年近く違うことによるが、その他に、筆者のサンプルでは教育水準の高い世帯が実際の分布以上に多く調査回答世帯として選ばれたことによるのだろう。また、表 - 3以下の表におけるメスチソ世帯は6世帯とサンプル数の少ないことにも注意を要する。

(注10) 今日の先住民学校の役割として期待される二言語教育については、2001年度よりいくつかの小学校でオトミー語の授業時間が設けられるようになったものの、授業はみなスペイン語で行われてきた。

(注11) 区にある村最大の小学校の例を取ると、2002学年度の始業時に校長も含む11名のオトミー教員が勤務していた。彼らの出身地と学歴は、SM出身者が5名(Normal修了1名、UPN未修了1名、高校修了1名、高校未修了2名)、イダルゴ州出身者が4名(UPNの修了と未修了1名ずつ、Normal修了1名、高校修了1名)、メキシコ州出身者が2名(Normal修了1名、高校修了1名)である。教員の学歴詐称や職の売買の噂がよく流れることから、最終学歴に実質の伴

っていない教員の存在も推察される。比較のためオトミー児童も多く通うドニカの一般小学校の例をみると、2004年2月時に同校に勤務する5名のメスチソ教員のうち4名はNormalを終了しており、1名は修士課程で勉強中だった。

(注12) 同校は「ビデオ中学校」であるため規模に制約があるが、それでも登録生徒数は、1990年度の28名から2001年度には84名へと増えている。現在オトミー児童はその過半を占めるだろう。

(注13) 世帯の生活水準の指標として、「5つの耐久消費財の所有状況(TV, ステレオ, ベッド, 冷蔵庫, 自動車の各々を、個数を問わず持っていれば1と数えそうでなければ0とする。合計で0~5の値を取る)」と「成員1人あたりの部屋数(台所も部屋に含める)」を取り、PROGRESAの食糧補助金との関係性をみでみる。同補助金を受けている世帯の消費財指数の平均は2.0, 1人あたり部屋数の平均は0.5なのに対し、受けていない世帯の平均はそれぞれ2.2, 0.8だった。消費財指数が受給世帯の平均2.0以下である世帯は、受給40世帯のうち23世帯、非受給50世帯の29世帯をそれぞれ占める。同様に、1人あたり部屋数が受給世帯の平均0.5以下である世帯は、受給40世帯の26世帯、非受給50世帯の22世帯を占める。食糧補助金の受益世帯は非受益世帯よりも若干貧しいといえるものの、受益者の選別は、最貧世帯を何よりも優先するという基準には則っていないことが窺える。

(注14) 玉蜀黍の種子に在来種でなく改良種(高収量種子)を使用する世帯は、90世帯中8世帯だった。

(注15) 2004年時における給料は、経験に応じて月額4000~7000ペソになるが、教員の中には午前、午後と2つの学校を掛け持つことにより、その倍の所得を得ている者もいる(先住民教育課監査官の話)。

(注16) 2002年末時点での基本契約給は週365ペソ(約35米ドル)であり、それに、技能に応じて上昇するインセンティブ給、(生産量の多い場合の)残業手当、社会保険などの付加給付が加わる。基本給は、建設現場の見習労働者の稼ぎに及ばず、地域の農業労働者が受取る賃金と同等かそれを若干下回る水準である。

(注17) 『1960年センサス』によると、同年のアメアルコ郡全体の先住民(オトミー)人口に占める二言語

話者の比率は47.2パーセントと、半分に満たなかった [Dirección General de Estadística 1963]。

(注18) SMではオトミー人口の増加率は高いものの、オトミー全体としてみるとその増加率は先住民の中で低く、比重は低下してきた [INEGI 1995: 25]。1970年から2000年の間に、先住民総人口に占めるオトミーの割合は7.1パーセントから4.8パーセントに下がっている。

(注19) Parker, Rubalcava and Teruel (2003) は、メキシコ全国の個票データを用いて非先住民と比べ先住民の教育水準が低い理由を説明する計量分析を試みている。それによると、先住民児童が一言語人口であることは教育に不利に働くが、スペイン語も話す場合には不利を及ぼすとはいえないという。

(注20) ただし、若い非就学者のスペイン語能力は就学者に劣るだろうこと、および教員の認識はあくまで主観的なものであること、に留意せねばならない。

区の外れにある小学校の校長は、スペイン語の能力に問題を抱える児童がそれを乗り越えることができるか否かは、教員の指導に依存すると答えている。

(注21) 筆者の90の調査世帯においては、小学校就学者の11.8パーセントがSM外の一般校に通学していた。

(注22) 『2000年人口センサス』より、小学校から1年も遅れることなく進学し続ければ高校生に対応する15~17歳の年齢層の就学率をみると、SMが28.0パーセント、全国が55.2パーセント、首都の連邦区が72.9パーセントだった [INEGI 2001]。

## 文献リスト

<日本語文献>

受田宏之・久松佳彰 2001. 「先住民と稼得所得における貧困　メキシコの『1997年全国先住民地域雇用調査』の分析」 『ラテン・アメリカ論集』35号 17-29.

米村明夫 1993a. 「メキシコのバイリンガル教育(Ⅰ)」 『アジア経済』34(4) 2-18.

1993b. 「メキシコのバイリンガル教育(Ⅱ)」 『アジア経済』34(5) 21-36.

1994. 「メキシコ先住民の教育機会への対応 (1920年代～60年代)」『アジア経済』35(3)23-42.
- < 外国語文献 >
- Aguirre-Beltrán, Gonzalo 1991. *Regiones de Refugio: El Desarrollo de la Comunidad y el Proceso Dominical en Mestizoamérica*. México: Fondo de Cultura Económica.
- Arizpe, Lourdes 1979. *Indígenas en la Ciudad de México: El Caso de las "Marías"*. México: Secretaría de Educación Pública.
- Bertely, María 1998. "Educación Indígena del Siglo XX en México." In *Un Siglo de Educación en México, Tomo II*. ed. Pablo Latapí, 74-110. México: Fondo de Cultura Económica.
- Dirección General de Estadística 1963. *VIII Censo General de Población 1960*. México.
- van de Fliert, Lydia 1988. *El Otomí en Busca de la Vida*. Querétaro: Universidad Autónoma de Querétaro.
- INEGI ( Instituto Nacional de Estadística, Geografía e Informática ) 1989. *X Censo General de Población y Vivienda 1980: Integración Territorial Estado de Querétaro Tomo 22*. México.
1992. *XI Censo General de Población y Vivienda 1990*. México.
1993. *Hablantes de Lengua Indígena: XI Censo General de Población y Vivienda 1990*. México.
1995. *La población Indígena Mexicana, Tomo III*. México.
2001. *XII Censo General de Población y Vivienda 2000*. México.
- INI ( Instituto Nacional Indigenista ) 2000. *Estado del Desarrollo Económico y Social de los Pueblos Indígenas de México, Tomo 1 y 2*. México.
- Panagides, Alexis 1994. "Mexico." In *Indigenous People and Poverty in Latin America: An Empirical Analysis*. ed. George Psacharopoulos and Harry A. Patrinos, 127-163. Washington D.C.: World Bank.
- Parker, Susan W., Luis Rubalcava and Graciela Teruel 2003. "Schooling Inequality among the Indigenous: A Problem of Resources or Language Barriers?," In *Who's In and Who's Out: Social Exclusion in Latin America*. ed. Behrman, Jere R., Alejandro Gaviria and Miguel Székely, Washington D.C.: Interamerican Development Bank.
- Prieto, Diego y Beatriz Utrilla 2000. *Yá hñini ya ñāñho Maxei: Estructura Social y Organización Comunitaria de los Pueblos Otomíes en el Estado de Querétaro*. Querétaro. INAH.
- PROGRESA ( Programa de Educación, Salud, y Alimentación ) 2000. *Evaluación de Resultados del Programa de Educación, Salud y Alimentación: Primeros Avances*. México.
- SEDESOL ( Secretaría de Desarrollo Social ) 2001. *La Política Social del Gobierno de México: Resultados 1995-2000 y Retos Futuros*. México.
- Taylor, Edward and Antonio Yúnez-Naude 1999. *Education, Migration and Productivity: An Analytic Approach and Evidence from Rural Mexico*. Paris: OECD.
- Ukeda, Hiroyuki 2001. "Pobreza y los Pueblos Indígenas: El Caso de dos Familias Otmíes Migrantes en la Ciudad de México," *Anales de Estudios Latinoamericanos* No.21 ( Tokyo ) 31-60.
- Warman, Arturo 2003. *Los Indios Mexicanos en el Umbral del Milenio*. México: Fondo de Cultura Económica.
- Wolf, Eric 2001. *Pathways of Power: Building an Anthropology of the Modern World*. Berkeley: Univ. of California Press.
- ( 東京外国語大学非常勤講師 , 2004年5月25日受付 , 2005年11月29日レフェリーの審査を経て掲載決定 )